

届いています 感謝の声

本会が助成した社会福祉施設から

地域ぐるみで利用者の働く意欲をサポート

社会福祉法人 よさのうみ福祉会 みやづ作業所 (京都府宮津市宮村 1604)



利用者の表現活動としても重視されている陶芸作業。傘松公園の厄払い名物「かわらけ投げ」の土器釜などを制作しています

名勝天橋立で知られる港町、宮津市。この地域には、1970年に与謝の海支援学校が開校したこともあり、「すべての子どもにひとしく教育(仕事)を保障する学校(場)を作ろう」という理念が脈々と受け継がれています。支援学校を卒業した子どもたちが「人間として豊かな成長、発達をとげることのできる集団労働を保障する場を」と、親や地域の支援者たちが働きかけ、1976年に宮津共同作業所を開設しました。

「単に施設ができて、そこで障害のある人が働くというだけでは、社会生活を営むことにはなりません。地域の皆さんにその姿を知ってもらい、障害者にとっての労働の大切さを理解していただくことが重要です」と荒川俊宏施設長。地域には支援者からなる後援会組織ができ、陶芸や縫製作業で作った製品は地域の学校の学用品や記念品として使われたり、土産物として商店に並べられました。地域のイベントには利用者が積極的に参加し、働くことを通して地域の和が広がっていきます。

トイレ改修で利用者の夢がまたひとつ叶いました

宮津共同作業所は、利用者の増加と運営や体制面の問題を解消するため、1989年に認可施設「みやづ作業所」として開設しました。

作業班ごとに班長とリーダーを選出し、作業内容の見直しやイベント企画などを行う自治活動は、作業所開設当時から続く取り組みです。リーダー会では、自分たちの生活に何が足りないか、どうすればうまくいくかを考え、

要望をまとめます。職員、施設、地域や行政、利用者自身へと、毎年4つの要望書を作り、懇談会を実施。行政の担当者と話したり、意見を交換し合う機会にもなります。

2009年に施設への要望として挙げられたのは、トイレの改修。20年使ってきたトイレは、壊れても部品の交換ができず大がかりな工事が必要でした。また壊れた部分以外にも、利用者の視点で改善したい点が挙げられました。本会の助成で、手洗い部分の衛生強化、バリアフリー化の徹底などの工事を2011年3月～5月にかけて実施。あらゆる状況の利用者がより快適に使用できるよう工夫され、利用者やそのご家族から喜びの声が寄せられました。

こうして、利用者が自らの働きかけで望みを現実させていくことは、彼らの大きな自信になるということです。また、周りへ要望するだけではなく、自分たち利用者間で改善すべきことも考えるよう作業所では指導されています。荒川さんは、「いい施設を作ろうと思いを素直にぶつけたり、相手の考えを尊重しようと努力する姿に、私たちも学ぶべきことがたくさんある」と言います。これからも、障害のある人が社会の一員として力を発揮できる場、働く意欲を



後押しするような環境づくりを、地域の方々と一体となって進めていかれるとのことです。(平成23年6月2日取材)



広々として車椅子でも動きやすくなった身体障害者用トイレ。いつでも使える温水器も設置

蛇口から自動センサーに変わった手洗い場。ハンドタオルから乾燥機に替えたのも利用者の要望です



いつも笑顔で活気あふれる毎日を

社会福祉法人オレンジの会 特別養護老人ホーム オレンジ荘 (富田林市大字龍泉 877)

金剛山を一望できる、自然豊かな高台にある特別養護老人ホーム「オレンジ荘」。ここでは高齢者が笑顔で、なごやかな生活を送れるように、「目配り・気配り・心配り」をモットーにしたサービスが行われています。主任の谷美恵子さんは、「お客様に心から笑っていただくためには、スタッフ自身が仕事を楽しみ、接することが大切です」と話します。

オレンジ荘ではカラオケやゲームで、お客様とスタッフが一緒になって遊ぶことが珍しくありません。また、週に2回は外出やレクリエーションなどの行事があります。外出先は観光地からラーメン屋さんなどさまざま。スタッフは日ごろからお客様の方との何気ない会話も大切に、「これがしたい」というお客様の好奇心をキャッチするよう心がけています。常に高齢者の視点で考え、新しいことにも積極的にチャレンジ。お客様とスタッフの皆さんの、活気に満ちた表情が印象的です。

お客様の安心・安全が信頼を築くことにつながりました

これまで、ナースコールが鳴ると、スタッフはサービスステーションに行くか、廊下の掲示板に表示される番号を確認して、急いでお客様の元へ駆けつけていました。対応するまでに時間がかかることもあり、その間お客様に不安な思いをさせることがスタッフの皆さんは気がかりだったそうです。しかし、本会の助成によりナースコールが新

しいタイプに整備され、その問題は解消しました。

お客様がナースコールを押すとスタッフ一人ひとりが持つPHSに情報が入り、介護の手を止めることなくその場で応答できるようになりました。

「すぐに行くので、ちょっと待っていてね」と会話ができることにより、お客様の不安もやわらぎます。お客様が線を抜いてしまうようなこともあるようですが、新しいナースコールには脱落を知らせる機能が付くなど、事故防止の安全性も高まり、とても役立っているそうです。



今年で14回目になる納涼大会は、年々地域の人の参加が増えています

便利になったことで生まれた時間は、お客様とのコミュニケーションをさらに深め、信頼関係を築く機会につながりました。今は7月の納涼大会に向けて、お客様もスタッフもいっしょになって準備をしています。開所当時から続くこの祭りには、盆踊り、屋台や花火など、地元企業の協賛もあり、地域の人々が大勢参加する施設の一大イベントになっています。

地域の中で見せるお客様とスタッフの皆さんの明るい笑顔は、人々の心を和ませる力があるのでしょうか。ボランティアに関わる人、イベントに参加する人は年々増えています。今後も活動の幅を広げられることが期待されています。(平成23年6月6日取材)



ベッドの中でも目立つオレンジ色のコード。明るい色がお客様にも好評です



コールにPHSで対応するスタッフ。お客様とのコミュニケーションがとりやすくなりました